ふじみ野市男女共同参画情報誌

燦さん No.24

企画・編集　市民総合相談室（TEL262・9001）
情報誌「燦」を一緒に編集してみませんか。興味のある人はご連絡ください。

●女と男が共に生きる社会をめざして

「燦」とは……

燦（さん）という言葉には、さまざまな意味が込められています。
自ら光を発してかがやく太陽、子どもを産み育む母親、産業に携わる人々。
人が人として充実した生活を送るために、今、さまざまな動きがあります。
そのことをより多くの人たちと一緒に考えるために、この情報誌をお届けします。

※より多くのみなさんにご覧いただけるよう「市報ふじみ野」に掲載します。

LGBTって何？

「性はグラデーション」とも言われます。
L（レズビアン）：女性の同性愛者
G（ゲイ）：男性の同性愛者
B（バイセクシュアル）：両性愛者
T（トランスジェンダー）：性自認が生まれた時の身体的特徴と不一致の人
特別な存在ではなく、生き方や個性の違いです。

新聞やテレビなどで取り上げられることも増えたＬＧＢＴ。性的少数者と呼ばれる層に属する人の割合は、左利きの人やＡＢ型の血液の人と同じ程度ともいわれています。今回は、当事者に悩みやＬＧＢＴを巡る社会の現状などについて「レインボーさいたまの会」の加藤岳（かとうたける）さん（代表）と当事者の稲垣晃平（いながきこうへい）さんにお話を伺いました。

加藤さんに伺います。まずは「レインボーさいたまの会」について教えてください。

会を設立したのは２０１８年です。性の在り方にとらわれず、誰もが認め合う社会の実現に向けて、当事者への理解を深めようと、交流会や講演会の開催など幅広く活動しています。また、県下の自治体に「パートナーシップ制度」の導入やＬＧＢＴに関する諸施策を求める活動などを行っています。

ＬＧＢＴがマスコミで取り上げられることが増えたと思いますが、日本の現状をどのように思いますか。

東京オリンピック・パラリンピックが近づいていることもあり、ＬＧＢＴに関する報道が増え、人々の意識は高まってきていると感じています。

しかし日本では、まだ同性婚が認められていないため、残念ながら法律上、異性愛者と同じように同性など（※）を愛する人同士が婚姻関係を結ぶことはできません。職場や普段の生活で、無理解からくる差別や偏見の目にさらされ、当事者の多くは将来への不安を抱えながら、ひっそりと生きることを余儀なくされています。

まだ同性婚が認められていない日本でも、自治体が性的少数者のカップルを公的に承認する「パートナーシップ制度」が次々に導入されています。同性婚と異なり法的保障はありませんが、この制度があることで当事者や家族は大きな希望と安心を得ることができます。自治体が公に「いる」こととして、存在を認めてくれることの意義は非常に大きく、胸を張ってここで堂々と暮らしていいんだという気持ちになれます。

稲垣さんに伺いますが、ご自身がゲイであることに気付いたのはいつ頃ですか。

中学生の頃からだと思いますが、明確に自覚するようになったのは高校生です。ただ、同級生に次々と彼女ができ始め、自分がゲイであることを知られるのが怖くて、そのことは一部の友人にだけしか話すことができず、他の人にはひた隠しにして生きてきました。

稲垣晃平さん

これまでに困ったことを教えてください。

精神面では、両親や近しい人たちに嘘をつきながら生活をしてきたことです。罪悪感を抱えながら過ごすことがとても辛かったです。

手術などの緊急時に、パートナーと婚姻関係がないため、病院で他人として扱われることにもとても不安を感じています。

物理的な面では、家を借りるときに「男同士はＮＧ」と言われたり、家を購入する際も両名ではローンを組むことができないため、片方の名義でローンを組まなければなりません。どちらかに万が一のことがあった時、財産問題で両家がもめる可能性もあるため、お金を払って遺言書を作ったり、相続税を払わなければならなくなったりすることもあります。これが婚姻関係であれば、金銭的な負担やストレスで悩む必要もなくなります。

今後、どのような社会になるといいと思いますか。

ＬＧＢＴという言葉を知ってもらうことは、存在を認めてもらうためには大切なことかもしれませんが、将来的にはＬＧＢＴという言葉がなくなるくらい同性同士で付き合ったり、結婚したりすることが、当たり前の世の中になってほしいと思います。

私自身は大切なパートナーと暮らし、今は幸せいっぱいですが、これからの世代の当事者が異性愛者の人と同じスタートラインに立ち、誰もが生きやすい社会になってほしいと思います。

最後に加藤さんに伺いますが、悩んでいる人たちに伝えたいことはありますか。

あなたは一人ではないということです。悩んでいる人には相談できる仲間「レインボーさいたまの会」（✉rainbowsaitamanokai@gmail.com）というコミュニティがあることを知ってほしいと思います。また無理をする必要はありませんが、少しずつ声を上げていくことで、世の中も変わっていくと思っています。

自分の身近にＬＧＢＴの人はいない、自分とは無縁のことだと思っている人もいるかもしれませんが、見た目では分からない、あるいは気付いていないだけで、当事者がすぐそばにいるということを前提に考えてほしいと思います。それが誰もがありのままで自分らしく生きられる社会につながるのではないでしょうか。

（※）ゲイやレズビアンの同性愛者だけでなく、トランスジェンダーで体の性と心の性が異なる人なども含むという意味で表記しています。

自分らしく生きることができる社会とは

前園進也（まえぞのしんや）さん（弁護士）

市内在住。埼玉弁護士会に所属し、家族のトラブル、刑事事件、LGBTなどの分野について精力的に取り組む。また、性のあり方に関わらず、誰もが結婚するかしないかを自由に選択できる社会の実現を目指す「一般社団法人Marriage For All Japan－結婚の自由をすべての人に」の理事としても活躍中。

性的少数者（LGBT）は、左利きと同じぐらいいると言われています。しかし、皆さんは家族や知人友人に左利きの人はいても、性的少数者はいないという人は少なくないと思います。私自身、性的少数者の法的支援を業務にしている関係から性的少数者の知人友人は少なくありませんが、仕事を離れた人間関係で性的少数者であると告げられたことはありません。その理由の一つに、日本社会では自分が性的少数者であることをまだまだオープンにできないことが挙げられます。異性が好きな人であれば当たり前にできることが、性的少数者にはできません。

性的少数者も自分らしく生きることができる社会とは、性的少数者が自身の性的指向や性自認に関することを隠さなくても済むことが前提となるのではないかと考えます。性的少数者が自身の性的指向や性自認に関することを隠すのは、それらを明らかにすると周囲から心ないことを言われたり、バリアを張られて距離を置かれたりするという恐れが理由の一つだと考えられます。このような恐れは根拠のないものではなく、そのような目に遭うかもしれないだろうなと思っています。

では、どうしたらいいのでしょうか。その方法の一つとして考えられるのは、性的少数者ではないけれど、性的少数者について関心があったり、よく知っていたりする人たちが、性的少数者を不当に扱わないこと、不当に扱われたときは助けになることをアピールすることだと思います。しかし、個人の力ではその影響力は大したことではありません。そこで期待したいのが行政の影響力です。市民の相談窓口に性的少数者のシンボルである6色のレインボーフラッグを掲げることや広報紙にオープンにしている性的少数者を取り上げること、4月からさいたま市でも導入される同性パートナーシップ制度をふじみ野市を始めとする多くの自治体で導入したりすることなどで、性的少数者にとっても住みやすい地域であることを示すことができると思います。そうすることで、勇気を出して性的少数者であることをオープンにする人が少しずつ増え、その結果、無関心な人たちの身近にも性的少数者はいるということ、そして、自分たちと何も変わらないということを実感する人も少しずつ増えていくと思います。そうすれば、自然と性的少数者であることを隠さなくても済む地域社会に変わっていくだろうと思っています。

MARRIAGE FOR ALL JAPAN